

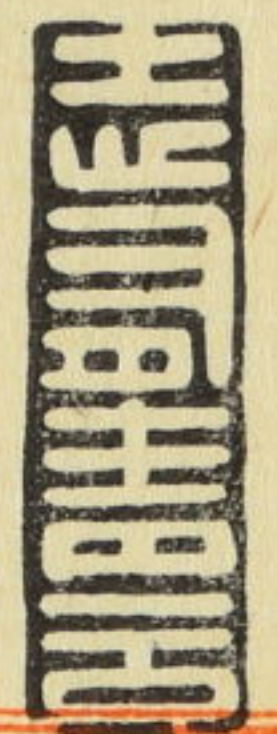
和漢

朗詠國字抄

一
二



和漢朗詠集抄序



倭詩朗詠集者四條垂槐公任卿所輯也

詩歌等一致和詩風情一蓋本邦和歌

以二句為一首也故詩不採全章文不撫

首尾而亦二句一聯以偶和奇句中銜奇

言外有閑寂の朗詠者也而公卿暨

紳若至皂隸無不貯視トク矣。此書行于世トク

殆八百年焉。其間始有江家註。中有覺解トク

經。玄慧之抄。后有永濟季吟之註。隨不足解カラ

釈。而麗者難迎。意密者倦シ。急義尋常兒女

之情。既出也。今也。書肆星運堂。新企梓行強テ

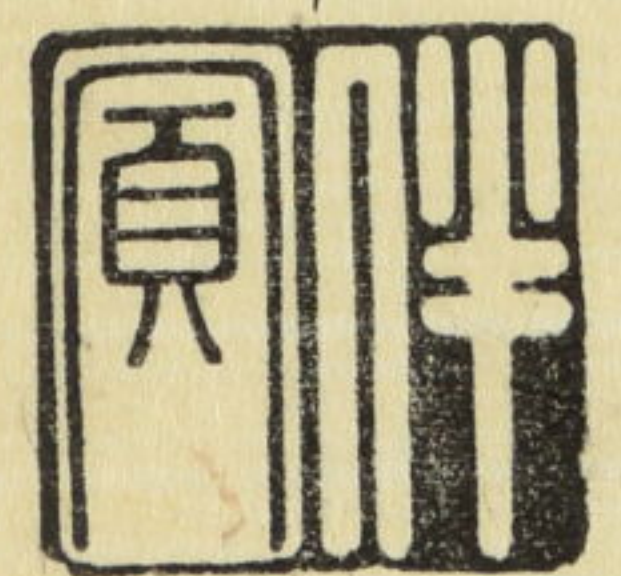
需我々。豈有外說乎。唯鼻古人之粹。去糟ラ

就麗細之。抄義於足。字兒童可モ。疑婦女の歌ク

此矣。為識也。總旨巷之詞。勿訝其野トク云フ

享和第一二就集癸亥之春日

高井伴寬述



和漢朗詠品題

○第一

春

詩文
和歌

九十七章
四十六首

堀米龜吉藏書

立春

早春

春興

春夜

子日

付若菜

三月三日

付桃

暮春

三月盡

閏三月

鷺

霞

雨

梅

付紅梅

柳

花
付落花

躑躅

款冬

藤

○第二

夏

詩文
和歌

三十五章
二十三首

更衣

首夏

夏夜

端午

納涼

晚夏

花橘

蓮

郭公

螢

蟬

扇

○第三

秋

詩文
和歌

九十四章
四十五首

立秋

早秋

七夕

秋興

秋晚

秋夜

八月十五夜付月

九月九日付菊

九月盡

女郎花

萩

蘭

槿

前栽

紅葉付落葉

雁付歸雁

虫

鹿

露

霧
擣衣

○第四

冬

詩文
和歌

三十二章
十四首

初冬
冬夜

歲暮

爐火

霜

雪

冰付春冰
霰

佛名

○第五

雜

詩文
和歌

七十六章
二十首首

風
雲

晴

曉

松

竹

草
鶴

猿

管絃付舞妓

文詞付遺文

酒

○第六

雜

詩文
和歌

九十四章
二十八首

山付山水
水付漁父

禁中

古京

故宮付故宮

仙家付道士
隱倫

山家

田家

隣家

山寺

佛事
僧

○第七

雜

詩文
和歌

六十九章
十七首

閑居 眺望 餞別 行旅 庚申

帝王付法皇 親王付王孫 丞相付執政

將軍 刺史 詠史

○第八 雜 詩文 八十七章 和歌 二十三首

王昭君 妓女 遊女 老人 交友

懷舊 述懷 慶賀 祝 戀 無常

白

通評 詩文 五百八十四章 和歌 二百十六首 全章のうち

より二句を採一聯として和歌の上句下句に擬する。又偶七言絶句四句なり。出でてはもと二章とす文も是に就て章を別五絶全くと一章なり。

○日本作者

醍醐天皇 六十代延喜の帝なり。和漢の作者傳の疑はれ暫これ成て黒く次他日古書の正説を得て鑿ををさめたり。

惟高親王 文德帝の皇子として清和帝の御兄なり。村上皇の皇子天曆の帝。延喜帝に嗣む。六十一代。

菅丞相 菅原是善の三男右大臣道真。公贈太相国北野天神と崇む。村上帝の御子二品中務卿具平親王。寛弘六年薨。

清慎公 小野宮關白實賴公の諡なり。貞信公の男藤原義公の父。彈正忠貞竹範の男中納言紀長谷雄卿字紀寛。紀家記是。

江納言 大江中納言維時文章博士。後江相公。從四位下大江王淵の男參議朝綱。天徳元年薨。

野相公 敏達帝の後胤參議守守の男小野姓參議皇。善相公。參議宰相三善姓清行。相公云ハナサテ參議宰相。

橘相公 參議廣相。菅三品。右大辨高視の男式部太輔三位大時卿。天元四年逝。

菅雅規 右大辨高視の男山城守。菅丞相の孫として菅三品の兄。大江匡衡。參議左大辨齊光の男。匡房の曾祖父。

源英明

寛平法皇の御孫齊世親王の御子左近衛中将前藏人頭家母

江以言

大隅守大江仲宗の男式部太輔文章博士

源相規

肥前守圓融帝御時の人

菅淳茂

菅公の四男秀乃才

源為憲

筑前守忠幹の男寛弘八年卒

橘直幹

尾張守秋成の孫長門守長盛の男康保の比の人

統理平

三統姓從四位式部大輔延長四年卒

源順

至の孫左馬允舉の男後撰集和名集の作者和漢の才人

良春道

良峯姓延喜の時の人

紀淑望

紀中綱言長谷雄卿の男古ヶ毛貞右衛門の作者

菅輔昭

菅三品文時卿の男大内記

都良香

主計頭貞継の男延喜の朝文章博士

藤篤茂

藤原敏系茂の男大内記

橘正道

少納言匡利の男宮内少丞高麗小渡り宰相とす

橘在列尊敬

延喜時的主君俗名橘の在列

慶保胤

慶滋姓近江掾加茂忠行の男法名想圓融帝御時の人

都在中

良香の男

小野美材

岑守の孫望の男掃部頭延喜の時の人

田達音

又忠臣とて本朝文粹の作者

藤為雅

周防守

義孝

謙徳公の男少將行成卿の父

藤伊周

中關白道隆公の男大納言後苑紫左近召返れ儀同三司

藤惟成

左中納言雅村の男世に在位の撰政と号す拾遺の作者

紀在昌

紀長谷雄卿の孫村上帝御時の人

江澄明

紀齊名

本姓田口後紀氏と改む大内記兼越前守

菅庶幾

右大辨高視の男大學助

橘侯草

本康親王の孫行忠王の男從五位下二河守

高相如

高陸姓出雲國司朗詠の作者公任卿の師

平佐幹

從五位下二河守

資忠

菅原雅規の男一条院御時の人

輔倡

菅原姓右少辨

物部安興

圓融院御時の人

清滋藤

圓融院御時の人

采女

美濃國十市の女

清原姓右少辨

此集に菅家紀新言等の名を記すに初小畧後小畧又紀新言と記次小畧紀と記又初の如く記誤小似り

漢作者

李斯

楚の上蔡の人秦に説て

左大仲

名思齊國の人少知より博覽なり

陸士衡

呉人名機牙門將軍とあり陸侍郎陸將軍とも

公乘億

字壽山唐の代朱才集一卷連昌宮の賦愁の賦あり

白居易

字樂天事に坐一江の司馬小迂る自ら醉吟先生と号す

温庭筠

唐の並刃の人字八飛獲書十餘言と云まり方山の尉とあり

元稹

唐の河南の人字八微之白氏の詩友元九と云是く

杜荀鶴

杜牧子八微子字八彦之九華山人と号す翰林學士

劉禹錫

唐の世の人字八夢得漢の景帝の後なり

李吉甫

又從一云長州の人唐の中臺に郎なり

許渾

唐の丹陽の人字八仲晦睦郢二州の刺史

王維

唐の大原の人字八摩詰官尚書に至る詩画高名なり

李峯

唐の趙刃の人字八巨山嘉祐が姪とて大曆十才子の一人

皇甫冉

唐の潤刃の人字八茂政十歳して文と作官左補闕あり

皇甫曾

字八孝常皇甫冉の弟侍御史監察後舒州司に駐す

宋子問

唐の汾州の人字八延清

賈嶋

唐の范陽の人字八浪仙初は浮屠を信す韓退之教て文を爲す

章孝標

唐の桐廬の人大理評事に官なり

張文成

名八鶯唐の涇州の人書錢學士と稱す秘書監至卒て諡憲

張讀

讀八續の誤八真縣の人宋の明帝の時中書令國子監酒

楊衡

字八中師唐の才子傳に出り

鄭師丹

劉元叔

名八敬和一八字八平叔高宛縣の令なり

郢展

謝觀

唐の羅鄴羅隱と名の二羅と名及一本に亂を維つ作非之

謝偃

唐の貞觀中述聖の賦を作り時の人謝賦と稱す

羅胤

唐の羅鄴羅隱と名の二羅と名及一本に亂を維つ作非之

賀蘭暹

字八進明唐の至徳中嶺南の經略使員外郎に終る

智者大師

天台山に住し摩訶止観成筆なり

前八も云とく初白居易と記し白と畧記せば終るまで白と有る哉然らざるハ謂ざるなり

和歌作者

仁徳天皇

應神帝の皇子人王十七代の帝なり

小松天皇

仁明帝の皇子五十八代光孝天皇之小松の陵に葬り奉り

村上天皇

詩の作者に出

花山院

冷泉帝の皇子六十五代の帝
早く世に厭ひ山に入法修す
法修

志貴皇子

天智の御子施基皇子の子云々
御子光仁即位す田原天皇と諡

安貴王

天武帝の御孫大津皇子の
御子

明日香皇子

養和元年薨久賀姓の祖
宇多帝の后宮温子

原見王

高市皇子五世の孫從五位上
高階峯峯緒の父

七条后宮

宇多帝の后宮温子

九条左相府

一条攝政

九条右丞相師輔公の男伊尹公
謙徳公と諡す

後中書王

詩の作者に出

清慎公

詩の作者に出

麗景殿女御

村上帝御時の女御
代明親王の御女

朝綱

詩の作者に出後江相公

齋宮

重明親王の御女伊勢の齋宮の
女御後村上帝の女御立身

人丸

柿本氏持統文武の朝仕石見
播磨守等の守歌道の仙
人丸大明神
正一位

赤人

山部氏正六位上宿禰養老神
龜の比の人人丸同等の哥仙

仲満

安倍姓父祖不詳元正帝室龜
二年入唐中書船守の男と非

篁皇

詩の作者に出野相公

大納言重光

代明親王の一男

家持

大納言大伴宿禰旅人の男
從三位中納言

安倍廣庭

左大臣御主の男權中納言
養老の比の人晴明先へ

藤原高光

九条右大臣師輔公の八男
五位左少將法名如覺

兼輔

勤修寺家の祖良門の孫左
將利基の子中納言

忠岑

古今撰者四人の内
李允忠衡の男 壬生姓
今も

平兼盛

光孝帝の御末大貳篤行の
男王氏より天曆の比平氏

宗干

光孝帝の御孫是忠親王の
二男正四位右京大夫

業平

平城の御孫阿保親王の五男
行平の弟在原中將美濃權守

紀貫之

望行の男從五位上伏守左頭
御書所之預 武内宿禰の末

重之

清和帝四代へ貞元親王の
御孫兼信の男東宮帶刀

元方

業平の孫棟梁の男歌道
賞美からて古今集巻頭大

藤原經臣

大學頭佐高の男
肥前守

千里

大江音人の男正五位下伊豫
權頭

友則

宮内少輔紀有明の男一説大非
古今撰者四人の内 大内説

賴基

伊勢祭主輔親の男神祇太
輔祭主 能宣の父

藤原興風

濱成の曾孫永谷の孫
道成の男從五位下相摸椽

公忠

大藏卿国房の男四位右大
辨滋野井井と号す

明永國字少

目

深養父

清原姓豊前房則の歌
内近大元藏人所の雜式

實方

左大臣師尹卿の孫大納言濟
時卿の男陸奥守
近院右大臣能有公の男

躬恆

允河内姓行氏の子孫謀利
の歌凡の字々常ち甲斐少自

正澄

忠見

忠岑の男撰津国大目

坂上是則

父祖詳る大内記延喜の
比の儒官なり

良材

詩の作者出望の男

惟正

中納言兼輔卿の男
從五位下刑部卿

清正

中納言兼輔卿の男藤原
左少辨五位天徳二年卒

敏行

按察使富士丸の男右兵衛督
四位少將

好忠

先祖詳る曾孫氏丹後檢
曾丹と稱す

元輔

清原深養父の孫下野守頭忠
の男肥後守後撰集撰者の内

能宣

大中臣祭主輔親の孫頼基の
男後撰集撰者五人の内

道信中將

太政大臣藤爲家恒徳の四男
從四位上左中將

義孝少將

詩の作者に出

橘直幹

詩の作者に出

良峯宗貞

良峯姓安世の男左近衛少將
進世と遍昭僧正是末再出

平貞文

好風の男

源順

詩の作者に出

爲頼

中納言兼輔の孫刑部少輔雅之男
曾大元大進拾遺の作者

高向草春

作者部類小官位等詳
形とわ

元眞

甲斐守藤原清秋の男丹後少
後拾遺の作者

伊勢

伊勢守藤原繼蔭の女
七条の右の官女

信明

南都興福寺の拾遺の作者

中務

式部卿敦實親王の御女

仲算

元亨親書に出

齋宮内侍

伊勢の齋宮の女御に侍
内侍と誰が女やや知べ

繩丸

詳る人丸の書誤り
といふ

白女

源造が女江口の遊女

丹後國人

詳るさう云るや
詳る

海人

江口尻の遊女の類と
水辺に住よみ云らん

王仁

漢の高祖八代の孫百濟国より
來て難波津の宮に仕

達磨大師

南天竺香至王の子梁魏より
西に唐代宗圓覺大師を贈

傳教大師

東漢の景帝の餘衣商三津氏
百枝の男若最澄は示の祖

空也上人

仁明帝の御孫常康親王の御
子六波羅密寺小住す天祿三

惠慶法師

播州の産寛和の比の人
父祖詳る

遍昭

俗名良岑宗貞の良僧正也
出づる茲竟の弟子寛平二祿
逢坂山の業門
延喜の御子と云説非ん
素性法師
遍昭俗名時の子俗名
左近將監良岑玄利

蟬丸

逢坂山の業門
延喜の御子と云説非ん
滿誓法師
筑紫觀音寺の別當俗名
盛朝臣麻呂從四位上

玄寶

和州三輪の山に隱遁の僧弘仁
五年律師に任ぜらるるを辭り
安法法師
内通の道子
拾遺の作者

所緝詠賦

詩 詩序 和歌序 書序表 讚願 史文 策序

書 本書文 文選文 漢書文 後漢書文 文集文

止觀文 遊仙堀文 和歌 自萬葉集至後撰集代
代之集及家々之集

本朝の詩文は菅家文草本朝文粹等より採出漢家の詩文は唱和集白氏文集の類より採來及び和漢諸家の集を拾りて此集の全章抄す取らざる題ありて句の解るる間題の意成記す和歌は万葉後撰の比至を取此集の作者公任卿後の撰集の各目を記し後に家集より撰す

和漢朗詠集

和漢朗詠集抄卷之一

東武 高井伴寬思明著

捨假字附讀と
仮字を加てよむ
助字ハ□を印と
此讀まじ一字成
再反讀ハ○を印
と次詩多くハ訓
おもみ來る今改
るゆり世本の點ハ
差を怪慮し

和ハ日本ニ 神武天皇大和國に於て王業を成り多故やまといハ和を以て日本の惣稱と云殊庭は倭を以て名く○漢ハ震旦之劉氏天下に王として國姓漢と号す 元來水の吾邦より彼國の古今は通ハ漢或ハ唐と云其治の盛るるに取をの○朗ハ清明透徹之○詠ハ詩歌の詠吟以上を以て本朝唐土詩哥の秀逸と云んが如 和國ハ思を歌ハ述漢土ハ詩を以て志を云詩哥は秀吟あはば人皆是成誦するを又朗詠と云○和哥ハ素戔鳥命出雲國を初て三十一文字成詠ハ詩を高書に五子之歌ハ毛詩ハ周の列國の古詩ハ漢の李陵字ハ少卿初て五言の詩成作り日本よてハ 天武帝の御子大津皇子初て詩賦を作らるるハ以來世々博才出で秀歌佳作文庫に滿ちて中ハ朗詠誦吟也○此をのぞ集て此書成り○四條大納言公任卿と云ハ三條關白賴忠公廉義公の嫡子也頼博雅の名ハ御堂關白の二男大ニ條關白教通ハ公任卿の撰りて一 一條帝ハ御時ハ當てハ寛政の今迄八百年及り

春

立春

吹を逐潜に開芳
菲之候を待不春
を迎乍不變ず將不
雨露之恩を希と

春

立春

逐吹潜開不待芳菲之候迎春乍變
將希雨露之恩

紀淑望

冬去春來
立春の氣と吹を逐て潜は梅花綻びて桃櫻芳菲の候
をも待て冬枯の樹々を春城迎也乍に變じ色付雨露之恩を希て開
んと次○延喜の帝は勅を梅花ふりて此賦を獻る賤は身のうら命を
蒙るハ夕樹の春にあひ寒木花初て綻ぶ如く君の恵を待と雨露
之恩を希ふに意を述よりさまで
凡註釈假字點を直に字義を覺
此句めてやく四位の加階ヤ一とぞ
如多し果て此字を斯訓と思ふ

池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒

池の凍の東頭風
度て解窓の梅の北
面ハ雪封して寒

春の氣、東方より成る同池の凍も東の頭より温か風篤茂
が度て解とひ春來もど北ハ雪封て冬の寒も寒く雪封て梅も咲ぬ

年れらちに春來りり下せと去母とやいふとやいふ

柳氣力無して條
先動池の浪の文
有て氷盡開

柳の邊の柳も芽は合枝力もりたが春立とむる風も動き
氷居り池水も開く浪の文が見ゆる次の句は通して二章へ
年のうち立春の頭のうらりり

柳無氣力條先動池有浪文氷盡開

今日知不誰計
會せ春風春水
一時小來

今日不知誰計會春風春水一時來

上は通して一首の絶句今日立春とて春風柳を動し春水池の浪ら
誰人計會てかく一時に春來りしむるや知ぬと昨不變る景色云

夜向殘更寒磬盡春生香火曉爐燃

夜殘更に向
寒磬盡春香火
生て曉爐燃

洋籠小江石山寺に詣て作る除夜の殘更小向しやと
佛前の磬は寒き音も盡曉の焼香も香爐の火は燃て温る今や春生
神はちてむむり水のゆるみは風やとらん

費之

其のころは彼も浸りも柳の水の冬氷を春風吹解るるいちてはひびいてはむまぶるにすまひなり

春のころは春景色山も多うに芳野山哉
よめる春を用ゆる儀と有り

早春

早春

氷田地に消て蘆
錐短春枝條小入
て柳眼低

氷消田地蘆錐短春入枝條柳眼低

先和風をて消息
を報せ遺續く啼
鳥をて來由説
教

先遣和風報消息續教啼鳥説來由

春の來を容小喻り
和風吹來先消息
成り春んと報
白居易

東岸西岸之柳遲
速同く不南枝
北枝之梅開落已
小異

東岸西岸之柳遲速不同南枝北枝
之梅開落已異

紫塵の懶蔽人拳
碧玉寒蘆錐脱囊

紫塵懶蔽人拳手碧玉寒蘆錐脱囊

多く萌出する早蕨の色此紫の塵の如く
人の手を拳するも春まゝ寒に蘆の芽が尖生て
青々と碧玉の玉の如く水

氣霽風梳新柳髮
氷消浪洗舊苔鬚

氣霽風梳新柳髮氷消浪洗舊苔鬚

庭増氣色晴砂緑
林變容輝宿雪紅

庭増氣色晴砂緑林變容輝宿雪紅

庭の春の氣色を増せ
晴砂小草が芽に
緑く見ゆる林の
樹々花咲容輝冬景色に引變る宿雪も紅の色を帯と上小草下に樹と云

紙納言長谷雄

紅のり

良言厚

卷之二

春

五葉 秋まふ
若くはひのりしを厭ふと出るまふはらるのの申

志貴

石の上の水のうらむ氷を舞氷と云ふはらるる水の水のうらむ
冬氷居るその上より早蕨萌ゆる春も成るる

山風 氷のうらむ下よりいづれは波やまの初花

正徳

山中より春の風に氷の解く流る水の岩をわらうて散る波の花と云ふ
早春より樹々の花も咲けは是れ春の初花なりとの心も今谷風かよふ

つんばと比る根も消ゆるまのつひくはぬ

兼盛

形違より比良近江の山より早春の景色を打眺を高根の雪も
消く野辺の若菜つと遊ぶ庭より長閑なるさゆはるる

ふんばとせ柳楊花にませくはまればはらるる

素世

此哥下の眺望の外に出早春の歌を糸字誤てあら
入るるるる末に叙す

春興

花の下に歸と忘
美酒に因樽の前
小酔を勤は是春の
風

花の下に遊景色の美は家小歸人とも忘て眺むる
樽の前酒を翫て春の風徐く吹く盃をうらみ酔は勤

作者早
白居易

野草芳菲紅錦地遊絲繚亂碧羅天

春の野の草芳菲より地に紅錦をの敷くは春の麗なる天は
碧の羅を張る遊絲繚亂する春の虚に有る無とく糸はうら

劉禹錫

歌いよととまなり

歌酒家家花處處莫空管領上陽春

今孤尚書が東都へ趣城送るの詩を春歌うひ酒は翫ては家家小
のり花も處處咲わたり行先其地はあそぶ花は賞し詩をも作て我が

一已小管領春と思て押領空く過風雅をまよも莫と春夏上陽は
上陽は春の下より陽と云ふも秋と冬は陰と云

山桃復野桃日曝紅錦之幅門柳復

月永

卷之二

春

日

山桃復野桃日紅錦
之幅を曝門柳復岸

歌酒家家花處處
莫空上陽の春管
領も上莫

野草芳菲紅錦
の地遊絲繚亂
碧羅の天

花の下に歸と忘
美酒に因樽の前
小酔を勤は是春の
風

柳風麴塵之絲を統

岸柳。風統麴塵之絲

紀齊名

野小著て展敷り紅錦繡天に當て遊織す碧羅維綾

山中也野にも桃が咲く日にくらうひ紅錦の幅をのび曝して門中也岸中也柳の芽吹く風が吹く黄なる絲を統るやうにふもろ麴の塵、黄なるも黄なるに此字をつつて統る共訓を處を逐て花皆好と云を作る。詩の序よりして山野門岸などの字は用ひたり

錦繡天に當て遊織す碧羅維綾

著野展敷り紅錦繡。當天遊織碧羅維綾

林中之花錦ハ時ハ開落す天外の遊糸は或有無

野ハ諸の草花咲交りて紅錦の繡せしはて展敷るべく天中ハ遊糸をりて碧の羅綾を織成る也。○前の野草芳菲と云ハ唐も管の此句を襲

林中之花錦ハ時ハ開落す天外の遊糸は或有無

林中花錦時開落。天外遊糸或有無

或ハ有無

林の中に錦を咲かせる花も時逐て開をわき散るあり。天外ハ遊糸ハ或ハ有るハ無さうなるも遊糸前に釈は

笙歌の夜の月家家の思。詩酒の春の風處處の情

笙歌夜月家家思。詩酒春風處處情

處處の情

新古今
しつ志ののちのちも人はいのちのちも横はらふも昔しつ
三月ハ節會公事ハ朝廷より四月ハ神事なり三月花の共開暇もわき花の下にハ櫻を簪してこのふもろも花はかき暮すも百敷ハ内裏ハ百官の座敷敷儀と云ハ非なるも大宮ハ殿上人と云如

春夜
燭を背て共ハ憐深夜の月。花を踏て同惜少年の春

春夜
背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春

惜少年の春

春の夜廬田周詩と云人同居して作るも共ハとり同とあり。燭を背て共ハ憐深夜の月。花を踏て同惜少年の春。庭に散る花を踏てハ春の暮るを同し心に惜む。少年ハ若輩といふ詞也。

春の夜乃雪をわかれ梅は必あつらん（子）雪はかくる（能）

咲る花の色はかくるもかど梅が薫をかき得んまうる春の（能）

子曰

付若菜 正月子曰岳に登て遠く四方を望て陰陽の静氣を得て煩除く通じて正月七日

倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜

羹而啜口期氣味之克調

寛平八年宇多天皇雲林院子日行幸の序松八貞樹小く風や霜も犯さず常盤の色を見ず是れ小く腰を摩て貞小習ふ正月七日若菜の羹を調和而啜る八人の氣味を調へ克して病を去るを期す

倚松根而摩腰千年之翠滿手折梅

花而捫頭二月之雪落衣

松根に倚て腰を麻手枝を折りて曳持て千年祝詞の翠手のうちわね子の日遊のさへ梅が枝を折て頭を捫りて花の散るる二月の雪衣袖落す

新古今 子日やえめける好日の雅小松ひるやふの陰成まほし

子の日の遊び小此野の我がをのしと御しんが小松の生ふるさぬ奥もむげらば其まおぼく千年の陰をもちんん紀伊守を任国の時々の日や

拾遺 子日よる好日よ小松のありせばふのゆめいにははむはた

野辺に小松ありて人々を壽の長かん松の千とせ小あやうんといひの哉さかく松を賞し

拾遺 子よせまかざむる松をりかゝる君小ひらこく五百やゆん

入道式部卿親王子の日くもふ處まである也松は千とせと隈もども今君の御齒らむば万年やふりぬ夫ひら松も万代をなさん

若菜

若菜

野中のちゆうの菜さいをを毛もぐ。
世事せいじ之これ蕙すい心しんに
推おし爐ろ下かにを羹けい和わ
て俗人しやくじん之これをを黃わう指しふ
屬ぞくす

野中ニ毛菜。世事推之。蕙心爐下。和羹。
俗人屬之。黃指。

野に出て若菜わがさいをを毛もつつ羹けいののにする世事せいじハ蕙心すいしんハ推おしぐぐ蕙心すいしんハ文選ぶんせんの字
もて美女びよハハ六女りくにょのの下かにを爐ろ下かハハぬぬどののりり和わももハハ烹調ほうてうのの俗人しやくじんハハこのの孫
の人ひと黃指わうしハハ羹けいのの下かにを羹けいのの女にょのの指しハハ詩しにに手てハハ采さい羹けいのの如ごと
とゆとへへ指しををはは入いてて味あじをを掌てのひら試しるるハハ婦にょにに屬ぞくす。

拾遺
わさささいささいはせん片かたののわわれれるるハハささややももくくめるる 人ひと丸まる

草木くさきをを肥こへへ生なかかんんてて春はるのの野のをを燒やくくややくく野の邊のハハ程ほどかかくく能よくく菜さい
生なぞぞんんとのの心こころももてて明日あしたのの下かににハハ片かた岡おか朝あさ之の原はらハハ大和たいていのの名な處ところなり

新古今
わさささハハののれれつつままんんととままめめののままりりももささややももくくめるる 赤あか人ひと

まめ野の前まへもも出いででままるるトト領りやうのの意いももああららうう
毎日まいにちももんんと思おもひひハハ雪ゆきににららままるるなり

新古今
わさささハハぬぬくくももぬぬくくままののままりりももささややももくくめるる 費ひ之の

野のに出いてて若菜わがさいつつ遊あそびびハハ奥おくのの淺あさみみをを家いへにに在ありりぬぬ人ひとももああららうう
忍しのぶぶとののままめめのの筆ふでももつつてて入いるるととはは筐かうととハハこののままりりなり

三月三日 付桃

昔周公旦浴邑ゆく城じやう築ちゆう多た時とき流水りゆう水すいよりよりてて鰓さう

御浮うきふふ是これ曲水まがみづのの宴えんハハ起おこすす上うへのの巳み日ひをを用もち魏ゑいよりより三日さん用もち

春來はる遍あま是これ桃もも花はな水みづ不な辨わ仙せん源げん何なに處ところ尋たずねね

春來はるててハハ遍あま是これ桃もも
花はなのの水みづ辨わ不な仙せん源げん
何なにのの處ところ尋たずねね

桃花源はなづかとと云い仙境せんけいをを題なづけけてて春來はるてて三月さんのの比ひ何なにのの處ところをを桃花はなづか
の水みづのの何なにをを證あげげてて仙源せんげんをを尋たずねねんんとと漢かんのの世よ武陵ぶりやうのの漁人りやうじん舟ふねをを江かみをを
上うへのの水みづもも小桃せうたうの花はな吹ふかかれてて人ひとのの通とほりり跡あとありり船ふねをを繫つりりてて尋行じんぎやうハハ家いへももなくく男おとこ
女にょ住すままののゆゆ故ゆゑをを問とふふ秦しんのの乱らんをを避よけけててかかくくととハハ十餘年じゆじゆねん食たべべせせるるとと十三年じゆさんねんをを
桃源たうげんのの隱士いんしとと名な付つりり
委いままハハ桃源たうげん記きにに見みゆゆ

春之暮月。月之三朝。天醉干花。桃李

春之暮月。月之三朝。天醉干花。桃李

盛也。我后一日之澤。萬機之餘。曲水

我后一日之澤萬機之餘曲水遙乎
雖遺塵絶乎
雖巴の字城書而地勢を知魏文を思て以風流成翫蓋志之所謹で小序の上

雖遙遺塵雖絶書巴字而知地勢思魏文以翫風流蓋志之所之謹上小序

春の暮月三月の朝三日此時節咲く花が映して天も紅く酔ふと見ゆるハ桃や李の盛る也書に天子一日万機と有てまづつのことこに臨み其餘を以て我后今日宴を臣下に命ず恩沢なるぞ后の恵ありと水をしてるを以て後代に云曲水周り始る也遙乎云後代に古の跡を追を遺塵と云此宴久しく行むる也絶乎と云江州に三の山峽ありて三面を水ある故曲水と云形に於て巴郡と号次巴の字を古文に書む◎かこの下は曲水の地の形勢知らる魏の文帝姓ハ曹名ハ不字ハ子植曹操の子ハ文帝の時曲水の飲り日を用ひず三日成用之今其先蹤を思て風流成翫ハ周の世遙乎と云遺塵絶乎と云昔を目前に見る也志之所之謹で小序と上と詩の序ハ毛詩の序に詩者志之所之と有り蓋ハ物を推て云と云つふ詞なり

煙霞の遠近同戸桃李の浅深ハ勸盃似し

煙霞遠近應同戸桃李浅深似勸盃
前の序と同時の詩ハ酒を飲り上中下戸あり煙霞る春の景色
遠に空も近き虚もむしく花に酔るる同ハどの戸とある桃李の紅の色浅きも深きもさうく酒盃成勸て天を酔ひるに似し

石に礙て遅來也
心竊小待流ハ牽て過過也手先遮

礙石遅來心竊待牽流過過手先遮
羽觴流を回る曲水の宴を作ふも鸚鵡の盃を羽觴と云流禁る菅雅規
水岸に文士並居て水上より觴を流し我前を過ぬ前に詩を作り盃を掬て飲貴賤を論ず文才を重する不血ハ石に礙らば流來ると遅れん詩篇巧なるハ心竊とく來せんと待流に牽立らばて過前を過小詩ハ毛詩吟ト
石に礙らば先手を以て盃を遮るといふ

水巴字を成初三日源周年より起後幾むく霜ぞ

水成巴字初三日源起周年後幾霜
三月初の三日曲水巴字を成の酒宴との源周の世の古き年周公旦
洛邑に觴を浮ゆり起て後今幾むく此星霜を経るらん巴字ハ前に叙

桃

夜雨偷小濕。曾波之眼新。嬌曉風緩吹。不言之脣先咲。

桃

仲春とて花咲三月その色さうん

夜雨偷濕。曾波之眼新。嬌曉風緩吹。不言之脣先咲。

紀納言

桃始て咲と云詩の序。夜の雨小濕。さ花の偷小。美人の眼の媚。今吹る意を新に嬌と書。曉は雨も止春の風緩吹て不言の脣先咲。不言を愛て脣とつひ眼の字に對せ。史記。桃本言。下あつて踏成と拾遺。二つもとせに。桃の。を。表に。あ。と。し。に。

西王母が園の桃三千年。花は實と云故事。漢の武帝桃の實を好む。春實のやれを愁ふ時に一足の青鳥武帝の前に飛來。東方朔とく王母來ると屏風の後かくるや。王母花と實の一時小む。桃を携來て。ま。味甚美。帝植んと。王母云。下土の物。わ。上界の果。三千年。小。び。實。は。此。屏風の。る。小。在。童。三。び。盜。食。の。と。さ。

暮春

水を拂柳花。千萬點。樓を隔。鴛舌。兩三聲。

拂水。柳花。千萬點。隔樓。鴛舌。兩三聲。

翅を低。沙鷗。潮。落。曉。絲。野馬。草。深。春。

低翅。沙鷗。潮。落。曉。亂。絲。野馬。草。深。春。

人更。少。時。無。須。惜。年。常。春。酒。莫。空。

人無更。少。時。須。惜。年。不。常。春。酒。莫。空。

劉白若今日の好

劉白若今日の好

春

九

良言回字抄
る深知ら此處とハ
言應何とハ言不

三月盡

春を留めども春
駐不春歸人
寂寞風風厭
風定不風起
花蕭索

竹院君閑銷
永日花銷
花亭
我醉殘春

惆悵春歸留
不得紫藤
花下漸黃昏

春送舟車
唯別殘鷺
與落花
若韶光
使我意
今宵
旅宿
詩の家
在

春留關城
月永

深春好と云題めて作りし劉禹錫と白居易と何處も春深好源順
云句を首小ち五言二十首の詩を作唱和集ある此二人若今日深春の
詩席好やう深知ら此處と云春深好と云
何との処と云と云いと此席を好といん

家の集に此歌あり古今月日ハたもやでと何で徒過行
月日何ともや花見春すくたやに何ゆと

三月盡

留春春不駐
春歸人寂寞
厭風風不
定風起花蕭索

春駐まらば暮歸て出て遊人とかく寂寞なり風起て花の散
わじ景色もさせて蕭索なり此詩ハ古詩の調に落花作

竹院君閑銷永日花亭我醉送殘春

皇甫氏竹を愛せり此人白氏の亭客小來り詩を贈其返
酬の作わり君ハ竹を植る院小永日花銷閑に暮る我ハ花の味
る亭に酒小醉を殘春と

惆悵春歸留不得紫藤花下漸黃昏

春歸去留ても得ざれば惆悵藤暮春より夏小至る花之外に
花もかれば紫の色を愛かちて漸黃昏小

送春不用動舟車唯別殘鷺與落花

人を送る舟や車をも用る春送はる殘鷺老て谷小入
花落て青葉とかわる春の別や車馬車乗としてのの

若使韶光知我意今宵旅宿在詩家

前通絶句一章韶光ハ春の名もさひく若韶光が此方まで
意を知る今宵一夜此詩の家旅宿人のと此詩春を送る云題

留春不用關城固花落隨風鳥入雲

春

固を用不花落て
風に隨鳥雲入

曹操ハ関羽を留んとて五関城固め先秦皇ハ胡人を留んと
長城を築すて人を留る關城の固で防べ春ハ中々留る花ハ風不隨
て落鳥ハ雲に入て跡を
とめ歸去り

春のつと春城思ぬ時ふもたら下やもにをれ流るハ

上の句と下の句の間に下をへま早く聞か今日限ま春の終と思ぬ時
花城慕心ハつとかりま今日もと思ふ花の陰ハ殊小立やすく思ハる

拾遺
花とそれちりぬる空ハゆくまれあさやくしをぬぬらけれ

花も散春の去る跡ハさびくそ人の住捨荒る古郷の如くける意とて
行春のぬるさよ先り成ぬるそハかりぬべさと云ふ同

後撰
又もみん時どと思どたのまもぬ我身ハあまそかりたまふ

今日暮る春ハ又來年も來まれば存命そくぐたのまもぬ世まも
むと一は春のくゆらかりたと貫之三月晦日此歌をよみ同年卒せり

閏三月

閏三月

閏を置て堯典に出れ古は上と周天の三百六
十五日二十五刻を二歳と二十四氣に分て十五日二

十一刻余を二氣とい内十五日去て残を氣盈とい又月ハ一年
の月數大小を積合ま三百五十四日三十七刻ハ月二十九日五

三刻余を月朔とる月月の定數三十日に足ると四十六
刻余ハ朔虚とす氣の盈と朔の虚と一年の過不及分合

て十日八十八刻と二年の閏余とい三年積て閏置高余ハ残
る也五年ハ再閏を置十九年に七閏ありて過不足の閏を

當る也又閏の字周禮ハ閏と漢書ハ閏と皆説あり

今年閏在春二月。剩見金陵一月花

本中丞が軍ハ行を送る詩之軍勢ハ在るも閏の春ハ
一月多し剩金陵ハ花の多き地なる其花を二月多けん金陵建康府在

歸谿歌鷺更逗留於孤雲之路辭林

舞蝶還翩翩於一月之花

鷺鳥ハ春の初谿より出て歌ひ春暮て谿ハ入る春ハ鷺鳥有と野て更
雲路に逗留もやしら花ハ舞蝶も春盡る也林を辭し去る今一

之花小於綉翻

マ

花根に歸ると悔

色ども悔に益無鳥

ハ谷小入んとを期

せども定て期を延

らん

鶯

雞既鳴て忠臣
但待鶯未出
未遺賢公在

月春のりとも還三月花の上の綉翻の糸と谷の字儀のやう少
差れをこよ用ひて○これ今年又春のりとも云題かて作る詩の序へ

花悔歸根無益悔鳥期入谷定延期

春暮れ花散て根歸り猶聞の春のりとも悔も益も

清原滋藤

鳥谷小入んと期する閏月ありと聞く定てその期を延ららん
古今
櫻むをほくくも新筆ごも人の心をあつちする

櫻の花の賞せらるる春二月閏加する年よもあつちのせぬと古今
よあつちもせぬと有夫のこゝろ此春のりともあつちせぬと櫻云

鶯

雞既鳴忠臣待旦鶯未出遺賢在谷

鳳を王とする賦之鳳凰初出三百六十の中七王は性仁はて賈島
帝王よも余餘鳥臣民と雞の且を告る鳳の忠臣鶯の未谷を出
かる遺賢かれ居て鳳の朝に出るふれよ晋の趙盾公に忠諫
天公怒て力士鉏倪の命て刺む倪趙氏の家忍入て伺盾衣冠

嚴陵

誰が家の碧樹小

猶垂幾なく處の

花堂小夢覺而

珠簾未卷未

霧に咽山鶯啼

尚少あり砂を

穿蘆筍ハ葉總

小分レリ

臺頭に酒有て鶯

月永國

春

十一

堂夢覺而珠簾未卷

謝觀

誰家碧樹鶯鳴而羅幕猶垂幾處花

誰が家や碧の樹は鶯鳴て羅の幕も暁を絞らず猶垂てあり幾
く處とも花やうなる堂に明く夢覺は此珠の簾も未卷揚すあり
て死す史記にまろ忠臣且を待の故事賢人いまも擧用する
遺され又殿は太公望儲漢か多れ周に伯夷叔齊首陽入泰の四
嶺商山よこのり漢は嚴亮孤亭山のくくもひ政の正
を怨てかくれらるる遺賢といふ聖人上は在て下は遺賢也

咽霧山鶯啼尚少穿砂蘆筍葉總分

春のはらち山より來啼鶯未細く聲少は朝霧の内に啼はハ元樹
云ど砂を穿出る蘆の芽筍ハ似るも葉を分ちひら早春のさる

臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池

春

十一

客呼。水面塵無
とて風池を洗

思黙と去人の別荘をそり其墓に酒を用意して有鸞酒を
勤く囀て客を呼庭の泉水を塵く清く風が池を洗ふや

白

鸞聲誘引來花下
草色拘留坐水邊

鸞の聲に誘引も花の下にうも出若草の青ふめて拘留
らも水をひきあつて芝をの坐せよ此詩ハ春の江が題トヤ

白

水邊坐す
同類を相求るに於

感同類於相求。離鴻去雁之應春囀。

感。離鴻去雁
之春の轉に應

大内に諸臣を召し宴多しひ題を詩歌を賦すを内宴ト云
是も鸞の轉が管絃に韻を題より詩を作る序文之鸞と類を同ト云

異氣を會而終
混ず龍吟魚躍之

そのよそ求むる春鴻や雁が北の胡国(離)を去時鸞の轉比に應すま
琴に離鴻去雁の曲春鸞囀の曲あるもか云り又類を異にするものふて

曉の啼に伴

管絃小混を尋法會を龍吟魚躍の聲有て鸞の曉の啼相伴
るも漢の馬融字ハ季長曉堤を行は龍水中の啼と二声して天の上る

燕姬之袖暫收
繚亂を舊拍

聲高きすて哀竹を鏘て吹其声を摸す笛是より始る龍吟れ
駭の湯王洛水に壁沈て魚を躍其声哀らりて魚躍の曲ト云

小於猜周郎之簪
頻に動て閒關を

前と同序文漢の昭帝后小趙飛燕と云、躡輕こと燕の飛ど舞
の上手之鸞の音を管絃と思て奏るやに拍子に繚亂ののらぬを

新路ハ如今宿雪
を穿舊巢ハ後の

拍が舊く朽てかくあるを猜て暫舞を止る意を袖收ト云ぞ拍ハ樂器
一よひんざらと詠す吳の周瑜字ハ公瑾能舞り鸞の轉が樂に韻和

爲に春雲ハ屬ら

て一の面白く新なる花に閒關くを顧るよびに簪が動くと閒
關ハ詩に現眺とある小同ト囀る郎ハこの姬ををこと云ト

西樓ハ月落て花
閒の曲中殿に燈殘

内宴に曉の鸞が宮殿近く轉る心の題をひいれ大内を云り
西樓ハ白虎樓中殿ハ清涼殿之神室宝劔を置御帳の四方燈あり搔灯と

て竹裏の音

菅三言

新路ハ如今宿雪
を穿舊巢ハ後の

去冬の雪が春に消殘るる舊巢春邊て後歸入る爲荒する雲ハ屬來らん

爲に春雲ハ屬ら

菅三言

西樓ハ月落て花
閒の曲中殿に燈殘

菅三言

て竹裏の音

菅三言

新路ハ如今宿雪
を穿舊巢ハ後の

菅三言

爲に春雲ハ屬ら

菅三言

西樓ハ月落て花
閒の曲中殿に燈殘

菅三言

て竹裏の音

菅三言

明永國字少

菅三言

いづれも消残るを云月の西に落と見明具の景氣で花の間竹の裏ハ
鶯のあつる處を曲と音とハ轉を云一説小西樓ハ霽景樓を云と

わび玉の年立ちの朝のりゝるりまゝのりゝるりのハ言はれし色 素性

わび玉ハ磨る璞之夫を砥すくみくあわゆるのりゝるり
る枕詞わり又ハわびるあわゆるのりゝるり

わび玉の年立ちの朝のりゝるりまゝのりゝるりのハ言はれし色 西廬景殿齋

浅緑ハ空の色うす緑なり又松のケドリハ

春らるるのあへ春立ちくといはん 枕言葉

らるるのあへ春立ちくといはん 枕言葉 中務

拾遺集に中納言朝忠とあり深山幽谷雪れ中といふも
鶯ハ春を忘る初音を發此鳥はハ冬の心も在る

霞

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

白居易

曙の後霞ハあつくひく火たよ春の空緑に晴來て

若草とく出らるる烟の立升るは火の字に烟を以對也

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

或ハ花の下に垂あはとして。潜ひそに墨子すみこ之の悲かなを増ま時とき鬢びんのあは間ま舞まで。暗くらに潘はん郎らう之の思おもを動うす

長樂ちやうらくの鐘聲しょうせいハ花外けがいに盡つ龍池りゆうちの柳色りゅうじきハ雨中うちゅう小深せうしん

養得やうとくてハ自花じかの父ちち母はは為な洗來せんらいてハ寧ねい藥やくの君臣くんしんを辨わんや

花はなの新あたらに開ひらく日ひ初陽しよやう潤うる鳥とりの老おいて歸時きし薄暮はくぼ陰かげリ斜脚しゃかくハ暖風ぬんぷうの先扇せんせん處ところ暗聲あんせいハ朝日あさひの未晴みせ未程みぢやう

雨あめハ樹じゆ後ご枝葉えはまま土中つちちゆうの水氣すいきを吸すて含くめる日小照せうしやう蒸むされて雲くもととれり昇ある其氣きハ水みづ也なり雨あめと成なり降ふる

雨

或ハ垂花あは下した潜增ひそま墨子すみこ之の悲かな時とき舞鬢まひん間ま暗動くらう潘郎はんらう之の思おも

長樂ちやうらく鐘聲しょうせい花外けがい盡つ龍池りゆうち柳色りゅうじき雨中うちゅう小深せうしん
漢の高祖長樂宮を建内小鐘を架時小多々て故其聲
遠くひらき花樹の外までもいづる盡し謝承武陵郡の守りたる黄龍

有て其地の水中に見ゆる小ぞ表うへをか賀うするて龍池りゆうちと名なづく其池い辺への柳りゅうの色いろハ春雨はるのこしゆに一色いろ深ふかくるるは龍池りゆうちの一武陵記りゆうじきに出いで

養得やうとく自みづか為な花父はなちち母はは洗來せんらい寧ねい辨わ藥やく君臣くんしん

春はるの雨あめをとく潤ひ養て花咲はなするハ父ちち母ははの子こを育むは也なり
医書に君臣佐使の別あり其病を治する主薬は君薬に君薬かして
つゝ薬を佐使といふ雨は花の薬なるも頻に降来てハ薬の君も臣も辨
むとくも普く洗ひてく寧ハかんごとく心此詩仙家の春雨の題を作る

花はな新あたらに開ひらく日ひ初陽しよやう潤うる鳥とりの老おいて歸時きし薄暮はくぼ陰かげリ

春はるハ巴は雨あめ中ちゆう小尺せうせきと云い題だいハ花はなハ春雨はるのこしゆ小開せうかい雨間あめまに出る初陽しよやう潤うるて見みゆると云い春はる深ふか鳥とりの音ねも老おいて歸かへる薄暮ぼくぼの雨あめに陰かげ景けい色しきハいづるか

斜脚しゃかくハ暖風ぬんぷう先扇せんせん處ところ暗聲あんせい朝日あさひ未晴みせ未程みぢやう

斜しゃ脚かく降雨かうあめの脚あしハ暖風ぬんぷう吹ふ東風とうふう小扇せうせんとてちり暗る夜の雨あめの慶保ほ龍りゆう聲せいハ朝日あさひ晴はり出る程小せう旭あした升ある比ハやぐて霽はるべきぞ

撥はりるる婦り女ぬれくハのいづるのいづるに入る人也なり

野山をこけて櫻花を尋るをまのり狩と云降來雨に濡るともいとも
花にあらうらうらくるれだこの花の陰にかくまんとの意
新勅撰

春柳の枝にうさばまると糸のめぐりうさるととてん 伊勢

春雨の露柳の枝にうさうさ糸を以て玉を貫てくもるとと 又いと
りてを畧すとつづの字人の言の内あつて外わつたれぬらうてをよと云

梅 付紅梅

白片の落梅、浮澗水、黄梢、新柳、出城、塙

白片、落梅、浮澗水、黄梢、新柳、出城、塙

梅の花片、白さが、澗水に散浮び、新に芽を吹て、柳の梢の黄、
白居鳥、
城の築塙よりさう出る、山の水を夾を澗と云ふに訓す

梅花帶雪飛琴上、柳色和煙入酒中

梅花雪を帶て琴上、
柳色煙に和して酒中に入

白梅の散來る雪を飛すも晋の師曠と云樂官四月白雪、
章孝標、
の曲を彈するに天大に曇て琴の上に降來ると云と取り青柳の下へ
酒を飲た緑の色が玉ふうう煙、青さとのちも、柳の色を煙とんと
和す、混ふ合へ陶淵明、閑居の門、柳五株あり其下に酒を弄と取り

漸薰臘雪新封裏、偷綻春風未扇先

漸薰、臘雪の新、
封する裏、偷に綻、
春風の未扇、先

臘、獵へ十二月、獸で取て先祖を祭るも臘月と云日、漢、
村上御製、
成日、魏、小辰日、晋、小日、日を用今、大寒、小、近、辰日、臘日、と、寒梅は
臘月、新に降る雪の封する裏より、漸薰、春風いも、扇來らざる
先、小、偷、綻て咲くると、寒梅、早花、結と云題の御製あり

青絲綵出陶門、白玉裝成庾嶺梅

青絲、綵出陶門、
の柳、白玉裝成、庾嶺、梅

晋の陶淵明名、潛門に五本の柳を植て自ら五柳先生と、
後、江、
云、其、柳、春風、小、靡て、青、絲、を、綵、出、す、と、大、庾、嶺、唐、土、五、嶺、の
玉、を、り、つ、て、裝、成、り、成、る、と、と、
一、つ、て、白、梅、多、し、其、咲、く、る、白、さ、

五嶺蒼蒼雲往來、但憐大庾萬株梅

五嶺、蒼蒼、雲往來、
但憐、大庾、萬株、梅

大庾、始、安、臨、賀、桂、陽、楊、陽、の、五、嶺、出、嶺、蒼、々、と、る、山、の、端、に、
晉、三、品、
雲、往、來、と、る、も、之、中、に、大、庾、嶺、と、り、萬、株、と、り、梅、咲、て、但、憐、

誰言春色從東到、露暖南枝花始開

誰、言、春、色、東、
從、到、露、暖、南、枝、花、始、開

南枝花始て開

煙柳色を添て着

小猶淺鳥梅花を踏で落と已に頻

なり

上に通じて絶句一章春東より到と謙言と南火體と暖か花も南の枝早く開南より來と云べし大座の梅南枝先開元録

煙添柳色看猶淺鳥踏梅花落已頻

煙ハ柳の青さを云春あうくくるまに柳の色は添てらんれあぬ菅三言を猶淺と作り鶯もどの花小と多り梅の散一風の詠物なり

○或説に堀河院の御時右衛門督師頼卿此詩を書からしむし無題の詩と信阿が説のよし

万葉 中一平ねこく梅一我花のそ樹の本はえ候より 安倍彦庭

往一年ハ過一年ハ根越てハ 根をりてハ

万葉 後村よみみんあひこ 我せいにんせんと思ひ梅のをもれもさず雪のすらすそ入

夫をせこととあもてむハ降れぬぞ我が夫にんせんと思へ 雪ぬりて梅の花ともんこぬと女の心はかりてとあも

拾遺 雪ぬりて梅の花ともんこぬと女の心はかりてとあも

こめて心に認てんわやハ無益之梅が香の霞をりてとあも春の霞が梅の花といふ立隠とも香は認て尋らむ誰人折取らん霞の隠

紅梅

梅含雞舌兼紅氣江弄瓊花帶碧文

雞舌ハ丁香其色赤く雞の舌に似れ兼雞舌香と云順ケ 元稹

和名集小説わり梅ハ雞舌香を合の香あつるのりハ紅の氣を兼ら

瓊ハ赤に玉ハ仙宮の樹を瓊樹と云江岸の紅梅の色をりて

仙家のあに玉の花咲樹を弄ふ似て水ハ碧の色の浪の文を帶り

浅紅嬋娟仙方之雪媿色濃香芬郁

妓鑑之煙讓薰 橘正通

仙人の薬方小絳雪玄霜わりと云梅の浅紅の嬋娟ハ彼絳雪及されが色を媿る濃香の芬郁ハ妓サの燒薰る香爐の烟も及糸匂を梅讓

有色易分殘雪底無情難辨夕陽中

明永國

誠知老去風情少見此爭無一句詩

大庾嶺之梅早落誰問粉粧

匡廬山之杏未開未豈紅艷

雲紅鏡を撃扶桑の日春黃珠を嬾す柳の風

愁宅晴庭月暗陸池逐水烟深潭心月泛枝交桂岸口風來混葉蘋

誠知老去風情少見此爭無一句詩

大庾嶺之梅早落誰問粉粧匡廬山之杏未開豈紅艷

雲擊紅鏡扶桑日春嬾黃珠柳風

愁宅迎晴庭月暗陸池逐日水烟深

潭心月泛交枝桂岸口風來混葉蘋

青柳の系より花を咲交りたる系と云はしき

暁くばるる柳小まふ系れいふふらふら

花付落花

花上苑に明は
て。輕軒九陌之
塵を馳猿空山
小叫で斜月千巖
之路を瑩

池色ハ溶溶として
藍水を染花光ハ
焰焰として火焼春

遙小人家を見て
花あを便入。貴
賤と親疎與を論
ぜ不

燒

日瑩風ハ高
低千顆萬顆之玉
枝を深浪を深表
裏一入再入之紅

誰謂水心無
濃艷臨で兮波
色を變ず誰謂

明詠國字林

右の哥一本に載るれどもち本多し一として
數より下は叙とふにぬ

新千載集
まの柳のまゆにこのもる糸をよまればくさぶさまのり

柳の芽を含いまさ葉枝出さぬ枝まのりこりと云て發の藤小糸のこさ
小准柳の春を賞まもる春來て色まるともあつ又くる糸の縁語

花付落花

花明上苑輕軒馳九陌之塵猿叫空

山斜月瑩千巖之路

張讀

漢の武帝宮内小苑とひり上林苑と名づく其花盛明かりと花
の公子公卿が輕軒をうご九重の阡陌を往來一人蹟まげ塵
馳て小叫と繁花を云て下に幽閑と云空山猿叫ふ比有明の月
斜月千巖と云て巖之路を照瑩と入の閑を題せ賦入

池色溶溶藍深水花光焰焰火焼春

池水の色青く藍小染るごとく花の紅が光ふや火のどく
春を燒と云て景色花のやます意溶々水盛なる白焰々ハのり

遙見人家花便入。不論貴賤與親疎

春家々の園林の花を尋る題を作る貴賤も親も疎も

瑩日瑩風高低千顆萬顆之玉深枝

深浪表裏一入再入之紅

天曆の御時花光水上浮顆まて文人の試行も其日の
詩序之花を玉に見たり日瑩風にみごとく云高く枝に咲る花低く
水よりつる影を多たを千顆万顆の玉と作る下の句ハ花を紅脂
に見たり枝を深水にうつる浪をそむると云あるハ表又ハ裏一入もて

薄紅再入ひくを濃くもるもの
つる梢と浪をそむると

誰謂水無心濃艷臨兮波變色誰謂

卷之二

春

七

花語不。輕漾
激して兮。影脣
動す

之を水と謂ん
欲

施之鏡清瑩
欲

之を花と謂ん
欲

濯之錦祭爛
う

織と何の糸自
織

唯暮の雨裁
風に任

花飛で錦の如幾
濃粧ど織者春
の風未箱に疊

始て識春風の機
上に巧るると唯

色を織のそ非芬
芳をも織り

眼貧蜀郡裁殘
錦耳ハ倦秦
城調盡す箏

花不語。輕漾激兮影動脣

同上

前小同。序へ水心をと誰云。心わきま。花の色濃艶。水に臨み。うらむ。波の色を變人の顔色を亦する。似り。花語。誰に。輕漾激あ。す。水より。花の影脣を。動し。人のくちむ。を。い。の。語。ど。

欲謂之水。則漢女施粉之鏡清瑩。欲

謂之花。亦蜀人濯文之錦祭爛。順

花の色水小浮を題する。序へ花の影。うらむ。水を入て。これを水とい。んと。され。水とも。不。漢の宮女が。面に。紅粉。白粉。施鏡の清く。瑩。て。も。思。水。花。と。蜀。の。成。都。に。思。蜀。の。國。の。人。が。錦。を。濯。文。の。祭。爛。り。と。思。蜀。の。成。都。に。小。エ。あり。浸。わ。く。錦。の色。う。蜀。江。の。錦。と。名。産。○彼國の織もの天下。高。日本。伊豆。の。八。丈。嶋。う。出。し。綿。織。似。う。織。自。何。糸。唯。暮。雨。裁。無。定。様。任。春。風。

花飛如錦。幾濃粧。織者春風未疊箱

始識春風機上巧。非唯織色織芬芳

眼貧蜀郡裁殘錦。耳倦秦城調盡箏

春の末花も少く。眼も希。題して。作る。眼。見る。ツ。ニ。の。殘。源。相。規。花。ハ。蜀。江。の。錦。の。裁。殘。も。貧。耳。小。く。眼。の。音。ハ。春。鶯。啼。の。箏。の。曲。も。聞。倦。る。を。り。調。盡。して。今。ハ。声。も。少。小。か。ま。り。秦。城。ハ。秦。の。都。を。云。箏。ハ。秦。の。蒙。恬。造。り。む。る。ゆ。か。く。云。一。ぞ。在。中。に。う。ま。様。の。か。う。は。ま。の。心。の。ど。ま。う。は。業。平。

落花

落花語不空樹

を辭し流水心無
して自地入

朝踏落花を踏で
相伴て出暮小ハ

飛鳥に隨て一時に
歸

春花ハ面面酣暢之
筵に關入。晚鶯
ハ聲聲講誦之座
に豫泰す

落花狼籍雨
風狂後啼鳥
龍鐘雨の打
時

閣を離る鳳の翔ハ
檻小憑て舞樓を

明承國字少

櫻の花ハ咲をまぢ散らまじ雨をひく風をちり花入んと思ふ人の心
いなるうさじふれを世櫻と云との絶てかく春の人心を長閑かかん
我々のほんぐてい其まゝにむねのちどむりつるま
櫻花咲く見小来り人にかしこ花かす尋も来ま花かく問も来
まトの心成いふ散てた後ぞしひふんと云か情け
ふてのまやんかかん櫻花もよらておぼと小せん
人小語聞るむらうくおぼやうれを花と邦毎拂りも
家ハの土産小せんよつとハなげ又畏やう

落花

落花不語空辭樹。流水無心自入池。

朝踏落花相伴出。暮隨飛鳥一時歸。

春花面面關入。酣暢之筵。晚鶯聲聲
豫泰講誦之座

豫泰講誦之座

太宰の帥宮の御前に史記を讀序ハ文士並居て宴成り酒も酣はて
心を暢る筵席に花を心あけて面々關入とく日も晚くの鶯聲々に
啼て史記を講誦座小
豫泰 關ハ安に宮掖入

落花狼籍風狂後。啼鳥龍鐘雨打時。

離閣鳳翔憑檻舞。下樓娃袖顧階翻。

散る花が風小ひくうさじふ枝の間に飛を題して作やう
鳳凰の閣を飛離ると又立ちう檻に憑て舞めると鳳を花小ひく

下娃の袖ハ階ハ顔
て飛

躑躅
晩葉尚開紅躑
躑躅秋房始て結白芙蓉

夜遊の人、尋來
て把んと欲寒食
の家ハ應に折得
て驚馬應

雌黄を點着て
款冬
天に意有款冬誤

閣を樹の檻を枝よらんく舞妓が奏終り樓城下るは階下下して
り顔袖を翻舞し娃美女花のたよ樓を樹に階を枝小聲翺翺作
極ちるよれ小風をこむくぐて元小ちしれぬをぞうり
花の散枝雪と見か雪ふる空風むらもあつる
まわりのどろろ空はゆる花の雪もさぐ
拾遺
このころれものまつこわびまばり胡ごますれ 公忠

紫宸殿の御前の櫻の花散をそとあつるのりハ主殿寮之禁中殿庭
掃除のしを司るこまゆつこハ主殿つら下部伴氏から御奴之説ハ
臣をこもと呼臣のまつことら 落花がなほら掃んとせ
かこ朝の掃除をせれとのあゆなり

躑躅

山石榴の名躑躅、安くはる只羊山榴を食躑躅
して死にゆつ羊躑躅の三字とつじく

晩葉尚開紅躑躅秋房始結白芙蓉

紅の躑躅の晩葉がこも尚開白芙蓉也、始て秋の房は結白
是ハ元十八の溪の住家を作ると下の句ハ秋の景物ナリ

夜遊人欲尋來把寒食家應折得驚

夜遊人ハ躑躅の紅枝火と心得燭小把んと欲寒食の
家ハ折て火なりと思ひ驚るん荆楚歳時記ハ冬至後百五日小疾風
甚雨の寒食と云此時三日の間世に火を禁し冷物を食す晋の文
公いま公のり時國の難を避て亡り介子推と云臣五人の英雄ハ介
子推ハ忠節をたし後文公入て位即位各恩賞あり介子推の其
事かろいふ怨て母とも綿上山の奥にかく文公是を出さんと山に
火をから焚き介子推は死す文公悔悲て火ハ賢人を失
をのこして國小禁じあり故事今に殘此詩山石榴艶て火ハ似る題
也いづるよれ此の思つじい孫がをわこ色ハ此の

款冬

本草ハ冬の花咲とあり今春の末の山吹と云この漢石
知せず和名集ハ款冬也木とす和歌連佳用之

點着雌黄天有意款冬誤綻暮春風

て縦暮春の風

書窓に巻有て
相收拾の詔紙に
文無し未奉行
（未）

處々に款冬の咲く書書の誤ある如く雌黄をて點を着るに
されど款冬親の字訓にて冬を款冬と云ふは冬を咲かすにわやまて春の暮縦ひ
うらみあやしく天も其意有てこそ
雌黄をてかく點を着るらん

書窓有卷相收拾詔紙無文未奉行

数々の黄小味る書をもる窓に朱軸黄巻とて黄藤の
深る経巻あつて收拾に詔書、黄紙を用ゐる山吹の色小に詔
紙小似れども文字かかれをいふも何の詔と
いふに未奉行すともなり

新古今
かたずなりこの受むひ川は流るる今や嘆ん山吹の花 原見玉

神南備川山城大和ニテ所ありて川とよむべしとせ此川辺ふ来り
蛙啼や生ぬるるに面白り後後の春思ひ出てさうらへ

拾遺
我々のいさひ吹らひとくはなゆらん春のなみだ 兼登

拾遺集よみみくちのいさひとく
いとふまひとくちとく

藤

悵望次慈恩三
月盡紫藤花落
て鳥關關あり

悵望慈恩三月盡紫藤花落鳥關關

三月三十日慈恩寺にて元十八の詩に此寺ハ唐の太子母后の爲白
小建多藤三月も盡る也春のよさを悵望の藤も散鳥啼て
とのあはせたるも關々ハ鳥の鳴鳥唐の太子ハ後高宗皇帝と
云母后ハ穆太后なり 此詩小鳥と云を關と云解あはれども限るべ

紫藤露底殘花色翠竹煙中暮鳥聲

四月小の春の残る題なり 露の底に藤の散残るが
紫の色をまぢ翠の竹煙のどくも中暮の關鳥啼

紫茸偏糞朱衣色應是花心忘憲臺

紫茸ハ偏糞朱衣
の色を糞應了
是花の心憲臺
を忘る應

彈正太脚の亭よ藤の花城をかちて作る彈正ハいすの字よ
内外の非違を糾すと司とる唐官御史基憲臺とも云て不法正
そが相當より論語に紫ハ間色とて正一と五色の外るれども云て
朱の色は糞を惡と云とあり邪路の正道を乱すと云く心忘る

ゆづりて藤の紫が五位以上の着すは朱の袍の色をうかぶ是は花の心
小憲基彈正を非法を糾す官たる故忘るるらん官位令小彈正太郎
のや正五位下小わらるるらん主の朱袍の色は庭前の藤がうかぶと云
て却てさむら藤の美しさを称する紫茸ハ藤の異名

田子浦拾遺とこそ白くなるをばさるるらんひんぬくのそえ
拾遺集ハ夏の部ハ人丸家の集ハ河小田子の浦あり是ハ越中の
多枯の浦の歌と云底ハ底まで藤の影水ふるるを底まもるる程
の花を我のそんるも本意をわづらひし持行く
人まもるるそと又藤並波浪ふるそむむと

續古今
とびそめる松のなごふあやむもかきふる夏の咲てちたれ
常盤小散ととむ松に咲てふる藤のたふかちるそと無益
若くそがむと藤のちる強がむあかりかくらむるそり

和漢朗詠集抄卷之一 終

和漢朗詠集抄卷之二

夏

更衣

春の衣は夏に衣小更る人常の御帳生絹小胡
粉まそ繪をうけ壁代をか徹し御畳まをひそりて

御服ハ御直衣すしの綾の御むと御張袴女房の袴のきぬ共
更衣のひとくさぬす裳ハ上臈薄もの小上臈うす色常の
ど所を御装束掃部寮わく御服ハ内藏寮より奉る
十月朔日又更衣あり八事根源江家次茅小雲上の行更へ

背壁燈残經宿焰開箱衣帶隔年香

光を此方向壁ハ燈の背より香より挑て曉かつと色は
一宿経る燈を残し今朝ハ更衣とて箱を開て夏衣は取出せば去
夏の年を隔る香が
こりつあれ

生衣欲待家人着宿釀當招邑老酣

生衣ハ家人を待
て着と欲宿釀ハ

夏

夏

夏

夏
更衣

壁に背る燈ハ宿
經燈残箱を
開箱ハ年を隔る香
を帯たり

良言厚守排
當の邑老招て
酣(當)

首夏

甕頭の竹葉春
を経て熟階底
の菴微夏入
て開

苔石面小生して輕
衣短く荷池心より

出て小蓋疎より

夏夜

風枯木を吹む晴
天の雨月平砂城
照ハ夏夜の霜

風竹小生夜窓
の間に卧月松を
照時臺の上に行

空夜窓閑螢
度後深更軒白

明詠國

菅公仁和の比讚州任国下居て作の生絹乃夏夜ハ家人の菅
裁縫を待て著んと欲宿釀する酒ハ邑の長老人を招て飲せんと思ふ
賞翫て酔小及ぶを酣と云燕の召伯二月ハ三二
邑老母の桃樹ハ會せハ婦人く作の成ト
拾遺
此の趣ハ先ハたのしむるをさぐるにふをわたり 重之
春の花の色香よまみる夜城かえりてハ夏ふるも
わび花をまくるふくらむなり

首夏

甕頭竹葉經春熟階底菴微入夏開

苔生石面輕衣短荷出池心小蓋疎

苔ハ短きとの石の面に生するハすじかどの輕衣夜を石
著せると荷の葉ハ池の心より生出來る小蓋の下ハ疎る初夏也ハ
物部安興

拾遺

我布のかさねやまはなぞらん夏夜かくとらんやの
垣ハ隣を隔るふらと春をへらと云又
郊の花がぐりく春の花を忘る心あり

夏夜

風吹枯木晴天雨月照平砂夏夜霜

江の邊なる樓より夕景色をかがめて作する枯る木に風の吹聲
晴る天に雨ふる月が平地の砂土を照す時ハ夏の夜ハ霜を置
つると思はる上句ハ次の
風の體もごと下句を此ハ入 砂ハ小ハ作

風生竹夜窓閑卧月照松時臺上行

軒に近竹の林ハ風すに夜窓を明く卧する松の木の間より
月の照來る時をさるにうも出臺の上ハ起行 題早夏の獨居と有

空夜窓閑螢度後深更軒白月初

卷之二

夏

三

尾重定表反

月つきの明あきらる初はつめ

空夜くらよは月つき出いづる宵よ闇やみの窓まどの前まへに螢あき飛とぶ閑ひま寂じやくの夜よ 紀き綱つな言ことば
まじく深ふか更さら月つき初はつめて出い軒のき端はも白しろく見みゆる夜よを五い分ぶん初はつめ更さらより五い更さら
小こ至しその更さらがさけるを深ふか更さらと云い
夜よ陰かげ房ふの歸かへの作しやうなり

夏なつの夜よを涼すずぬ小こ明あきらぬとひかひくかおとや思おもはざうらん 人ひと丸まる

戀こひ哥うたなりあましく寝ねもやぬいとや明あきらるとせ思おもひのたふくそ物ものなり身み
よ短みづか夜よも明あきらるぬるとは涼すずぬ不ふのぬ明あきらぬ畢はつめのぬ涼すずぬ不ふにわけ畢はつめへ

家集けしふ
むらさきもや皇みかどの夜よをむらさきもや明あきらるるも 同

拾遺集しゆいしふよりみくもひ独ひとり寝ねる明あきらるるも一ひとの字あざなの字あざなハ助すけ字あざなへ
つひつひぬるとつひつひ一ひと皇みかど月つきの異あや名なも月つきの畧りやく訓しんへ

古今ここん
夏なつの夜よはぬもやす涼すずむ郭くわく公こうむく一ひと夜よはわくは志しはれぬ 費つひ之の

志しのめハ晨あさのめ
歌うたの意い釈しやく及およびす

端午たんご

端午たんご

端午たんごは五月ごがつの月つきへまの午ひま日ひを端はつめ午ごと云い
べきを今いま五日ごにちを用もちて午ひま日ひをまじへ楚しよ人ひと屈くつ平へい五月ごがつ

時とき有あり戸こ當あら

時とき有あり戸こ當あら
故園こゑん足あり任まま

有あり時とき當あり戸こ當あら身み立た無な意い故園こゑん任まま足あり行ゆく

五日ごにち初はつめの午ひま日ひは羅ら羅らに陥おちて死しす楚しよ人ひと此こゝ日ひ蔣しやうの葉えん小こ飯いひを
納い五色ごしきの糸いとを巻まき水みづに投なげ祭まつりと云いふ又また此こゝ夜よ藥やく露ろ降ふると云いふ

荆楚しやうしよ歲さい時とき記き楚しよ國こくの俗しやく端たん午ご小こ艾あを以もて人ひとの形かたちを作つくり門かど戸こをけりて毒どく
氣きをまじへ女によ人ひとを懸かへ云いふ是こゝを題だいと云いふ五月ごがつ五日ごにちの時ときに有あり女によ人ひとが危あやく

戸こに當ありて立たり草くさを束たばく入いるを意いをたまたまに風かぜ吹ふきこぼして已おりて已おりて
取とりて園のちまで行ゆく轉まひ行ゆく足あり任ままと云いふ人ひとの故郷こきやうと云いふ故郷こきやうと云いふ故郷こきやうと云いふ

家集けしふ
ころころころころあひくころころあひくころころあひくころころあひく

昔むかし内うち裏うらまで端はつめ午ごの競馬けいばあり其その若駒わかしやうこを追おひ若駒わかしやうこを用もちる又また昔むかし浦うら
草くさも此こゝ時とき用もちる生な後ご馬うまの追おひをくわて負おうと云いふ

拾遺しゆい
ころころころころあひくころころあひくころころあひくころころあひく

昨きのうまで池いけをわたりて餘所あま小こを今いま軒のきに葺ふく思おもひ人ひと城じやう吾ご毒どくと
わくわくするにわくわく又また物ものの端はつめをつまむ宿しゆくのつま軒のき端はつめの意いを合あは

納涼なつすず

納涼なつすずは二ふた字あざなを

朝あさ詠えい詩し字あざな

卷まき之二ふた

夏なつ

二ふた

青苔地上殘雨を
消し緑樹陰前晚
涼を逐

露簾清瑩迎夜滑
風襟蕭灑先秋先
て涼

是禪房に熱の到
くと無にあらず但能
心静るも即身涼

班婕妤が團雪之
扇岸風に代て吟

長忘る燕の昭王
の招涼之珠沙月
小當て吟自得

卧て見新圖臨
水の障行て吟ず
古集納涼の詩

池冷水無三伏
の夏無松高
風一聲の秋有

青苔地上消殘雨。綠樹陰前逐晚涼。

露簾清瑩迎夜滑。風襟蕭灑先秋涼。

不是禪房無熱到。但能心靜即身涼。

班婕妤團雪之扇。代岸風兮長忘燕。

昭王招涼之珠。當沙月兮自得。

卧見新圖臨水障。行吟古集納涼詩。

池冷水無三伏夏。松高風有一聲秋。

京六条京極小融の大臣の家あり河原院是へ此院の長秀
上人の坊をて作る冷ひやうく夏至の後第三の庚の日を初伏四の庚を中
伏立秋の後初庚を末伏とすて三伏と云夏火氣盛して秋の金氣
か運伏する義池水すはるくすはる夏もく松吹風涼く秋の心地
菅三品文時卿評して風高松有一聲秋
とて作るべしと宣ひしと云

古今六帖 是れやとあむしどはらちらもぞあつていづまはらちのむすむ

常夏ハ瞿麥之其名れ冷うぬと床よまきいふく
我が居る床のあつさを思ひ知るころは暑ぞ増しゆく

新千載 水は秋もかほしむすぶ泉のくみはせしき 中務

手すくふを掬ぐと云夏をも知ぬやど泉の冷さを
感下此下潜水水もややくも秋のくみ来るまよとあは

拾遺 石井筒のくみゆるる岩井と云むむび上の掬ひ汲なり
河原の院のつづものゆきまてすまにうみくろなる

晩夏

竹亭陰合偏宜夏水檻風涼不待秋

永安と云処の水邊ある亭をて作るかたより竹林あり陰を合て白
透間のれく茂る夏八日をよけて宜水臨高欄より風涼く秋を

待小及ぬ檻ハむすま言す
欄杆といふふられ

夏うつらあむしと秋のふあつとむすまはらちのむすむ

新古今集ハ壬生忠岑とあり 夏果は比翁もちりてくも冷くも
小露もいづらうとてとてんも扇とつゆはつづも先くはあせん

拾遺集ハ藤原長能とあり 神に祈る禰宜説讀をも聞入る荒神も
かひくも夏越の祓と和むるも拾遺ハ蠅聲荒れる神もかひくも

花橘

盧橘子低山雨重 桝欄葉戰水風涼

西湖より歸るとく孤山寺を望て見る冬の景色を作る盧橘
の子が多くとあり枝椈低る山近く雨ふいと重くかは湖水は

吹来る風涼く桝欄の葉が戰

枝えだと金鈴かねすずりを繫つなぎ春
雨あめの後のち花はなハ紫麝むすぶ射やは
薫かほす凱風がいふうの程ほど

枝えだ繫つなぎ金鈴かねすずり春雨あめ後のち花はな薫かほ紫麝むすぶ凱風がいふう程ほど

春はる雨あめハ養やしやう食じきして後のち熟じやくしる花はな橘たちばな黄きを枝えだと金鈴かねすずりを繫つなぎ
後のち中ちゆう書しよ玉ぎよく
凱風がいふうハ橘たちばなの花はなの薫かほハ麝むすぶ香かうのにおハ紫麝むすぶ香かうのにおハ其その獸けつの色いろハ紫むら也し
也やハ云いハ凱風がいふうハ爾なん雅や毛もう詩し等とうハ南風なんふう也や
こハ夏なつの火ひ体たいの風ふう也や

さうさうつた橋はしの香かほはぐむむ此こ人の袖そでの香かほもすれ 伴り縁ゆかり

古今ここんハ今いまハ人ひともさびしあり此こ歌うた業わざ平へい宇う仇うの勅ちやく使し下くだりしむと云いハ伊勢いせ物もの詩し歌か
を伊勢いせがさみさると取とりてと云いハ又また橘たちばなハ垂たれ仁に天皇てんかうの御み時とき田た道だう間ま守しを異い
邦はうハ非ひ時ときの果はを求もとめぬハ不ふ開ひら守しが袖そでハ入いり来きりぬむむハ人の入いり
袖そでの香かほハむむと云いハ又またハこの年としも五月ごがつまで花はな咲さ其その香かほも知しる人の袖そでの香かほ論ろん
時ときもさうさうつた橋はしの香かほはぐむむ此こ人の袖そでの香かほもすれ 伴り縁ゆかり
新しん古今ここんハ今いまハ人ひともさびしあり 郭かく公こう花はなもさびし香かほを心こころに認とめて
さうさうハおもしろむむハ人の心こころにやとさう

蓮

花はなを蓮れんと云い葉はを荷かと云い
根ねを藕うといふなり

風荷かぜかの老葉らうはハ蕭せう
條じょうとして緑ろくなり。
水蓼すいれうの殘花ざんかハ寂じやく
寞ぼくとして紅こうなり

風荷かぜか老葉らうは蕭せう條じょう綠ろく水蓼すいれう殘花ざんか寂寞じやくぼく紅こう

葉展はのひて影かげ翻ひら砌せきに
當月たうげつ花はな開ひらて香かう散さん
ず簾れんハ入い風ふう

葉展はのひ影かげ翻ひら當たう砌せき月げつ花はな開ひら香かう散さん入い簾れん風ふう

煙翠えんすい扇せんハ開ひら清風せいふう
の曉あけ水みづ紅衣こういを白しろ
露るの秋あき

煙開えんひら翠扇すいせん清風せいふう曉あけ水みづ泛ひら紅衣こうい白露しろる秋あき

何なにに縁ゆかりて更さらに
覓みん吳山ごさんの曲まが便べん

縁ゆかり何なに更さら覓みん吳山ごさん曲まが便べん是こ吾君ごきん座ざ下した花はな

是五君座下の花
るまばり

岸竹枝低應鳥の宿する潭荷葉動是魚の遊るん

經六題目為佛小眼為知ぬ花

中に善根を植

郭公一聲の山鳥曙雲の外萬點の水螢秋草の中

亭子院の寛平法皇五十の御賀行も御子延喜の帝行幸あり御屏風小吳山千葉の蓮華を画一を獻覽有ての御制夜之佛氏の説小天竺の流水大臣罪を犯一かちを吳山の曲小池わたり青蓮花あり是を尋求る罪を免入との王命をうけりてかこに至る青蓮花赤梅檀あもとも大龍まのり近付いと聞て吳山羅漢を請問られ南無佛と唱へ龍神も佛子と思ひ害せと教のいじて花を採得て王に獻一免され法華傳も是より此意を作らるゝて何ぞ更の吳山の曲をよび覓ふ此画一とち其蓮る吾法皇の御座の下の花

岸竹枝低應鳥宿潭荷葉動是魚遊

池邊の亭より晩の景色を作し岸の竹の枝低く鳥が塘をよびる

經為題目佛為眼知汝花中植善根

妙法蓮華經蓮花題目は題目は若くすと又諸經小佛の源為憲眼を青蓮が喩てあり汝諸の花のちも善根を植るものと知る佛眼の

釈迦末の佛事の詩に又法華經一部八卷の後秦の鳩摩羅什三藏の翻譯するなり

心にて八持て之欺詐り濁小殊ぬ清淨の心を持たりかき雨露を玉と足せのやと又のりてこの字は思はず柳の歌小秋す

郭公

郭公の公の魏鳥とけり故の名又公蜀の望帝の蜀の蜀魄とも云漢小規其外餘呼多知名保止々木寸の禽類小はくあり云々

一聲山鳥曙雲外萬點水螢秋草中

曙の雲の外に山鳥とけり一聲啼萬點の螢秋のくさむら飛く小樹草螢一化す水辺のくさむら水螢と云多記と少記と句成曲白さつたやちやつちたの時をわくさるあつたのやちんるきた

新後拾遺は赤人とりやちやつたれと五月闇のくさむら空をさしつるわりのちるらに遙たりとわす

拾遺 螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

一撃のやうに今一撃聞かたまに 行もまびとらず日暮るる 此哥北の宮裳着の屏風の繪をよめる女の裳着ハ男の元服小同

拾遺 螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

螢火亂飛で秋已 辰星早没して 夜初て長

兼葭水暗螢 知夜楊柳風高 雁送秋

明月仍在誰 追月光於屋上 皓皓不

豈積雪片於 床頭

山經卷裏 疑過岫海賦 篇中似宿流

宿

宿

宿

兼葭水暗螢 知夜楊柳風高 雁送秋

明月仍在誰 追月光於屋上 皓皓不

豈積雪片於 床頭

山經卷裏 疑過岫海賦 篇中似宿流

宿

宿

宿

伝書は作ら其山の部を山経と云へ螢火は是城よる螢が山の岫に
飛過ると疑はる岫は山に穴ある処又木玄虚海賦を作ると文選に出
るを螢とてあは流水に
螢が宿るもももも

そあゆむとあはせしる春のそよびの風よきんせぬ螢けりうり赤人

新勅撰いよみ人志す風はさえぬはらう叢のあはる火を流る
屋のその火とんらう風は消ぬふしとそてハ螢よそありし知る
後撰集

つめどもかくせぬもの夏虫はあうらわゆる思ひけりうり

宇多天皇の皇女柔子内親王を桂の皇女と奉りて奉りて螢をさくこと
ありし童女千代の袖にそつとてうらうら又大和物語は桂の皇女
の御許に敦慶親王がうらひのいを宮の童女こひて
よみ奉るとありとるハ戀哥やう

蟬 土中の虫夏に至りて
蟬とる露を飲りて啼

遅遅はる春日。王梵暖兮温泉溢。嬾嬾

遅遅はる兮春の
日。王梵暖あして

兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅

白

兮温泉溢。嬾嬾
兮秋の風山
蟬鳴て兮宮樹
紅

驪山宮の賦なり秦の始皇宮を建し天子行幸して暑を避
る小唐の憲宗帝ハ六宮百官従ひ行て路す貴多を思 行幸
多ざるを美て作る白氏文集樂府の中ハ出。驪山高の詞や
遅々ハ春の日永さ之玉の梵ハ宮を覆るる始皇此山とて神女ト遊ハ
いさる背とあを想て神女嘸とる身は痛とる帝恐と射
多ひれハ神女心とて温泉を出しわとめ愈る故事とて温泉溢
云々々々風の色秋を告る此ハ山蟬鳴て
宮樹ハら樹々の梢ハ紅つてて松あをさる

千峯鳥路含梅雨。五月蟬聲送交秋。

千方つらる峯峯はえわを雲とらる梅雨は借すささ
鳥路ハ雲路と云ど梅熟す比の雨は梅雨と云又梅ハ微之五月雨の湿
微を生するを云又月令ハ四月を交秋とすハ百穀其生するを春ト
熟するを秋とて交ハ四月熟ハ五月刈也四月を秋とす五月の空ハ鳴蟬
の聲ハ過行交の秋は送ると行
人を送るどく云るなり

千峯の鳥路梅
雨を合。五月の
蟬聲交秋を送

鳥綠蕪下秦苑靜蟬黃葉漢官秋鳴

今年例異腸先斷是蟬

悲の意悲客意悲

歲去歲來聽不變莫秋後遂爲空

歲去歲來聽不變莫秋後遂爲空

鳥下綠蕪秦苑靜蟬鳴黃葉漢官秋三體詩小も出て感陽宮の荒るるを詠之始皇の崩るるを詠之今ハ荒るるを詠之

今年異例腸先斷不是蟬悲客意悲鳥下下てあふ蕪ハ悲呼ん秋の梢黄葉を過つた蟬の聲も悲く漢宮の盛なり秋の寂れたるを述す

今年異例腸先斷不是蟬悲客意悲菅公讚岐守として任國その御作之今年ハ例年より蟬の聲が音悲く腸が斷るやれ蟬の聲のなるをわし昔秋客成て意悲也斯聞

歲去歲來聽不變莫言秋後遂爲空歲ハわつたもいも蟬の聲ハ年々同じ秋の後院の空蟬紀納言ハわつたもいも蟬の聲ハ年々同じ秋の後院の空蟬

身の老れ指の老れ人の老れ

こころのわづらひ

後撰これいんもいんもいんも

後撰集小ものいんもいんもいんも

扇

女媧氏扇を造日本平教盛始とすと云ハ後世の事と其前すに扇あり

盛夏不消雪終年無盡風引秋生手

裏藏月入懷中

扇を胸す盛夏暑夏雪あどく常の風ハ止てわさども年のこと

新裂齊紈素皎潔如霜雪裁爲合歡扇團似明月

下大雪の詩の叙あり

扇

盛夏不消雪終年無盡風引秋生手

裏藏月入懷中

扇を胸す盛夏暑夏雪あどく常の風ハ止てわさども年のこと

新裂齊紈素皎潔如霜雪裁爲合歡扇團似明月

下大雪の詩の叙あり

期不夜漏初テ後唯翫秋風未到前

不期夜漏初テ後唯翫秋風未到前

輕扇明月波動すと云題を白扇のうぐを月よはせ

期せば待合されと云心夜漏と銅の器の水を盛下に孔をあけ水を漏

一兩の壺に右を畫し左を夜と云漏刻是之初分は左の壺

夜とする初月ハ夜を期して出せども是ハ扇の月也登出夜後期合

さぬ月ハ秋を賞するも是ハ秋風

くぬ夏の初ぞのてあまぶ

拾遺 天の河川漱石に七夕にあそび風は初夜の中勢

羅の扇に織つけ

くろ歌なり

拾遺 への川扇の風うきをかきとすむさくる勢のそ

こころと云詞橋の縁あり 鶴のそし七夕二星の紙とよみ

秋の巻七夕の所にくろく秋すもはくの器す

家集 思がてにまるする秋の風なれどあびぬまふしりよるふ

北の宮の内は献りあし御扇と詞書あり王の椅子に坐る扇
るも此風よ天下の万民叶木もこれあびてと祝ふ

和漢朗詠集抄卷之二 終

Handwritten text on the right edge of the page, including the number '1002' and other illegible characters.

Handwritten numbers '1002' and '1003' on the right page.

